

# Poster

# Presentation\_2013\_franky

*by* Franky R Najoan

---

**Submission date:** 03-Mar-2020 08:07AM (UTC+0700)

**Submission ID:** 1268057230

**File name:** franky\_\_POSTER\_2013\_Tokyo\_Marine\_Univ.pptx (204.03K)

**Word count:** 2081

**Character count:** 2689

# 1 インドネシアにおける協働学習 —ピア・フィードバックを取り入れた音声教育—

Franky R. NAJOAN (マナド国立大学, インドネシア)

## 研究背景と先行研究

- ・インドネシアでは音声教育はあまり行われていないことが現状
- ・多国籍の日本語教師を対象とした調査では、アクセント教育はあまり行われていない。その理由は、自信がない、アクセントの知識不足、教科書に書いていないなど(磯村,2000)
  - つまり、教師の問題
- ・インドネシア人にとって長音の発音が難しい(ナヨアン他、2012; ナヨアン、2013) → **長音+アクセントの教育が必要**
  - **音声専門の教師ではなくても音声教育ができる方法の検討:**
  - **ピア活動が音声教育にも可能(房2007;2010)**

## 実践 3 ピア・フィードバックを取り入れた音声練習

**目的** 母音の長短に焦点を2つてた音声学習の産出におけるピア活動の効果を検証する  
特に日本語の長音・短音の誤発音傾向、長音内のピッチ変化を関連付けて調査する

## 研究課題 3 ピアフィードバックによって:

- ① 長音の誤発音が減るか
- ② 短音の誤発音が減るか
- ③ ピッチ型による誤聴傾向はどうか

## 研究方法・手続き

2

**対象者** インドネシアの大学の学生

- ・実験群(新入生)20名
- ・統制群(2年生)20名

## 指導方法

- ・1~6回目 日本語の音声について母語で説明+練習
- ・7~22回目 長音・短音の練習:
  - ① 長音のピッチ変化の有無+ピッチ個所の特定
  - ② 短音・長音の聞き分け練習
  - ③ 短音・長音の発音練習(ピア活動) ピア編成3人組  
→モデル音声を聞いて再生させる  
→S1が発音して、S2、S3がフィードバックを与える

## 学習時間

4ヶ月 12週間 授業90分の内20分 全22回 計7時間

## ピア活動を取り入れた理由:

- ・学生にとってお互いにモニターができる経験が重要
- ・音声専門ではない教師にも可能な方法

## 効果の測定

- ・単語リストの読み上げと自然発話
- ・実験群 2回(実験直後+実験後8ヵ月=1学年終了時)
- ・統制群 1回[実験無し](1学年終了時)

## 産出テストの方法

- ・テスト項目 104語(練習用と異なる)
- ・実在の単語 基本語52語+上級語52語
- ・104語に含まれる音節 長音90音節、短音172音節
- ・自然発話は、テスト項目は特に決めていないが、自己紹介・家族・趣味とロールプレイ

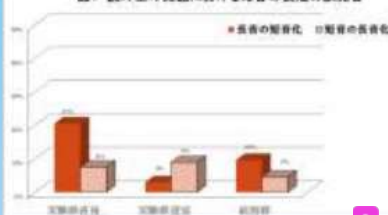
## 手続き

テスト項目を読ませ、録音。録音したものを母語話者に評価してもらう

例: (1)これは「きもの」といいます  
自然発話はインタビュー式で行った

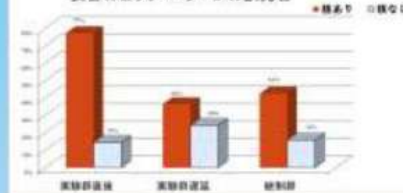
## 結果

図1 読み上げ発話における母音の長短の誤発音



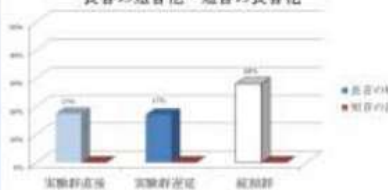
【読み上げ】実験群直後、長音の誤発音率が多かったが、実験群遅延、下がった。統制群と比べると低い

図2 読み上げ発話における長音のピッチ・パターンの誤発音



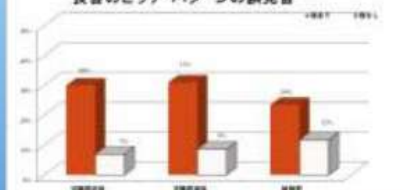
「核あり」のピッチ型の誤発音は目立っている。学習者は、読み上げの時、下がり目のある長音を平坦で発音する

図3 自然発話における長音の短音化・短音の長音化



【自然発話】短音の長音化は起こらなかった。長音の短音化は実験群より統制群の方が誤発音率が高い  
●ピアFBの効果が見られた

図4 自然発話における長音のピッチ・パターンの誤発音



長音のピッチ・パターンについて実験群の方が誤発音率が高い  
●ピアFBの効果が見られなかった

## まとめと今後の課題

1. 読み上げ発話では、実験群・統制群とも誤発音が少ない
  - 3 覚的情報が与えられて時間がコントロールすることが可能、モニタリングの余裕がある
2. 自然発話では、母音の長短に関しては、練習の効果が見られたが、ピッチの下がり目については練習の効果が見られなかった
  - 母音の長短を正しく発音させることより、下がり目の位置を正確に発音させることのほうが困難

- ◆自然発話におけるアクセントの練習について効果が見られなかった。今後の教育においてイントネーション等他の要因も考慮に入れて1 練習方法に改善を検討すべき
- ◆ピア・フィードバックによる縦断的な変化を見るためのデータを収集し、教育方法の改善・効果の実証をしていくことが必要

## 参考文献 REFERENCES

- 磯村一弘(2000)「海外のノンネイティブ教師から見た日本語音声教育—語アクセントの教育を中心に—」, 第2回日本語音声教育方法研究会 (<http://www.isomura.org/myself/resume/2000.html>)
- ナヨアン, フランキーR・横山紀子・磯村一弘・宇佐美洋・久保田美子(2012)「インドネシア話者による日本語の長短母音の習得に関する調査—聞き取り・読み上げ発話・自然発話のデータから—」『音声研究』16(2), 28-39.
- ナヨアン・フランキーR. (2013)「インドネシア話者に対する日本語教育における音声指導の効果 —母音の長短とアクセントに焦点を当てて—」政策研究大学院大学(博論)
- 房賢嬉(2007)「協働的な説明構築—発音ピア・モニタリング活動を協働学習たらしめるもの—」『人間文化創成科学論叢』御茶の水大学 10, 55-65.
- 房賢嬉(2010)「持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリング活動の可能性—対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—」『第5回国際日本学コンソーシアム「日本」とはなにか』お茶の水大学

## ABOUT THE POSTER

Title : “Indonesia ni okeru Kyoudou gakushuu : pia fiidobakku o toriireta onsei kyouiku”

Author: Franky R. Najoan (State University of Manado)

Presented on the International Symposium of The Society for Research of Collaboration in Language Learning, Theme: “Nihongo ni okeru Kyoudou Gakushuu Jissen Kenkyuu”

Held on November 23, 2013

<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/wp/wp-content/uploads/2013/12/6dee0c550a1dd89369d7ee48c821a84c.pdf>

Organizer: *The Society for Research on Collaboration in Language Learning*, 協働実践研究会 (<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/>)

Place: Tokyo University of Marine Science and Technology, Shinagawa Tokyo, Japan

# Poster Presentation\_2013\_franky

---

## ORIGINALITY REPORT

---

**21** %

SIMILARITY INDEX

**16** %

INTERNET SOURCES

**8** %

PUBLICATIONS

**0** %

STUDENT PAPERS

---

## PRIMARY SOURCES

---

**1**

**kyodo-jissen-kenkyukai.com**

Internet Source

**8** %

---

**2**

**seesaawiki.jp**

Internet Source

**8** %

---

**3**

**Hanoi University**

Publication

**6** %

---

Exclude quotes      On

Exclude matches      < 2%

Exclude bibliography      On